現代と禅仏教の対話

岡島　秀隆

(上)

二者択一的な情報社会

「言葉の創造性」今こそ

昨今、物事に白黒をつける傾向が多くなっているように感じる。ゲームの勝敗にこだわり、自分の好き嫌いをはっきり表明することが求められ、挙げ句は人生の勝ち組・負け組といって人に優劣をつける。そして世の中が二元相対の世界だから致し方ないなどという。本当にそうだろうか。

世界は矛盾に満ちている。なぜなら、この世界を作った人間自体が矛盾を抱えた存在だからである。だが、この人間の内なるルツボこそ創造の源泉であり、曖昧性とアンビバレントがその特徴である。そう考えてみると、現代人の思考傾向は、あまりにも二者択一的で融通性に乏しいのではないか、そして、それが合理的思考の本性であるかのように思うことは、果たして正しいのだろうか。

ともあれ、全地球規模で国際化が進み情報化の波が簡単に国境を越えてゆく、そんな現代は多様性の時代とも言われる。われわれの周辺で多様な価値観や思考が交叉し、さまざまな商品が流通する現代社会においては、個人も集団も物事を取捨選択することによって整理し、ときには切り捨てなければ、混沌の渦に巻き込まれてしまうのだから、われわれは無意識に二元相対の世界を容認しているともいえよう。

こういう時代を生きるのは刺激的だが実に辛く苦しい。それゆえ現代人の深奥には二つの思いが宿っている。第一はこの刺激的な時代を心底から享受したいという思いであり、もう一方はこのストレス社会の疲労困憊から逃げ出し癒されたいという思いである。

禅仏教はこうした二つの根源的欲求にどのように応えられるのだろうか。

刺激的な現代社会は情報の化学反応の実験場である。宗教の領域でも状況は変わらない。もちろん、安易な優劣の議論は慎まなければならない。異なる環境風土の中で人々が受容してきた信念や慣習を簡単に否定するべきではない。だが、宗教の叡智が現代との接点を見失って権威に固執するべきでもない。宗教的言説はかつて宗教的権威に守られていた時代があった。しかし、世俗化は今日の諸宗教を飲み込んでいる。この状況下で禅仏教のうに応答するかに眼目が置かれている。それは気ままに勝手な言いたい放題を認めることではないし安易な作品の解釈とも異なるが、弟子たちが自己の全身心をかけた言葉で心境を吐露する姿勢には、読み手の視点を尊重するバルトの現代的主張に通じる面がある。

さらに、道元の『正法眼蔵』に示される言葉の解釈には、漢語に対する深い洞察と独自の創造性があり幾多の霊感を与える。

例えば「有時」の巻では「有時」の語釈に「有（存在）が時である」と述べ、「而今」の語には「而今（今時）に経歴あり」と含蓄ある解説を加える。また、「現成公案」や「無情説法」の語に関する説明では、テクスト概念を言語から森羅万象へと拡充した独特な立場を示している。

言語観は言語の創造的機能に再び光を当てるかもしれない。

ロラン・バルトは、その「テクスト論」において従来の作家論と作品論の概念を反省し作品に対する「読み手」の解釈を重視したが、禅問答の手法は師の問いかけに弟子たちがどのよ

これらの例は言語が単なる伝達手段ではなく、世界認識の限界を拡張しようとする人間の創造力に深く関わっていることを再確認させてくれる。柳宗悦は晩年の一文の中で「言葉は全く魔物であります。人間に生まれることは、この魔物に取りつかれることとも言えます。言葉を持たない樹や草のほうが平和とも思えます」と語ったことがある。宗教の言葉はときに権威的となり自縄自縛の教条主義を生んできた。だが、禅仏教の言葉の融通無碍な用例や言葉に対する姿勢は、現代情報社会の言語認識に多くの示唆を与える可能性がある。

おかじま・しゅうりゅう　1954年愛知県生まれ。南山大文学部哲学科卒。愛知学院大大学院博士課程満期退学。2002年から1年間、米カリフォルニア州スタンフォード大学仏教学研究所で在外研究。現在は愛知学院大教養部教授・禅研究所長、曹洞宗霊松寺（同県北名古屋市）住職、比較思想学会理事など。主な研究分野は宗教哲学、禅仏教の解釈学的研究。